

古澤 仁氏を偲んで

木村方一

小生の研究生活は、学生の古澤仁君と共にスタートした。今私が追悼文を書かねばならないとは、何とも辛いことだ。北海道教育大学札幌校地学教室に助手で採用された私は、石工室の片隅に、年季の入った両袖机とバネの抜けた回転椅子を与えられ、住み心地悪く座っていた3日目ぐらいに、1人の学生が飛び込んできて、「先生は化石の研究者と聞きました。僕は化石に興味があるので、よろしく願いいたします」と名乗ってきたのだ。

化石研究をしたと言うほど化石論文は無かったが、古澤君と一緒に発掘と研究をするチャンスはその年の夏から始まった。1977年9月、地質調査所山口昇一さん発見の歌登町でのデスモスチルス発掘である。2年生の彼と1年生3名を車に乗せて、歌登へと向かった。この年は頭から前半身を発掘し、後半身は翌年に持ち越された。1978年は7月の歌登の発掘に続いて、9月には深川市で大型化石の発見があり、通報を受けた北海道開拓記念館の北川芳男部長から発掘の協力を求められた。北大の秋山雅彦先生がリードする北海道野尻会のメンバーと一緒に発掘と地質調査を進めた。発掘した化石は長い下顎骨を持つヒゲクジラであり、古澤仁君が卒論教材として研究することになった。教育大学札幌校に運び、彼はクリーニングを開始した。クジラ化石研究者は日本国内には存在せず、邦文の論文は無かった。もっぱら英文、時にはフランス語の文献の判読も求められた。古澤君には、英文論文の読み込みを頑張って貰った。そして、2人はクジラ骨格の観察をするために津軽海峡を渡った。国立科学博物館の資料室・東京水産大学の展示室・日本鯨類研究所の展示室などで写真撮影と計測で情報を記録し化石と比較したのだ。その結果、深川標本はセミクジラ科のバレヌラ属で、種は不明と「深川産クジラ化石・発掘調査報告書」の中で報告した。

深川の地質調査2年目合宿中に、滝川市の空知川河床で化石発見(1980)が伝えられた。8月16日、調査団は深川からの帰途、滝川の露頭を観察したが、ダム放水で水位が上がり十分な観察にはならなかった。水位低下を待つ8月23日土嚢を積んで発掘を試みた。木村は学生の本州地質巡検が予定されていて、発掘は古澤仁君と、北海道開拓記念館の赤松守雄氏が指揮することになった。発掘した標本は滝川市の郷土資料館で、急遽組織された高齢者事業団のメンバーと地元小中高等学校の先生等でクリーニングを開始した。

古澤君は札幌市内の小学校の教員になっていたのだから、土曜日は木村・日曜日は古澤が滝川に通ってクリーニングをチェックした。長い肋骨から、又もクジラかと推測したが、クリーニングが進行すると、鯨とは全く異なる肩甲骨や上腕骨の「形」が現れたのだ。

古澤君はこれを大カイギュウであると判断し、記者会見で発表した。ニュースは全国に広がり、国立科学博物館の

研究者某氏が「見せて欲しい」と申し出てきた。そして、帰り際、あの化石はどうするの？(科博に任せませんか)と言わんばかりだった。私は直ぐに回答した。「古澤にやらせますから、ご心配なく」と。そして古澤君に言った。

「この化石を世に報告するまで頑張ってくれ」と。その為には研究できる体制作りが必要だった。滝川市の綱淵教育長に相談した。教育長の決断は早かった。古澤君を滝川市立高校に異動させて、研究に専念する体制を立ち上げたのだ。小学校担任クラスの児童たちは寂しかったようだが、仕方がなかった。彼はフカガワクジラからタキカワカイギュウへとテーマを転換して研究に取り組んだ。もはや国内での研究では解決しない。アメリカ西海岸で発見されている海牛標本の観察と比較が求められた。彼は英会話の習得に努力し、私は、アメリカへ研修派遣することを教育長



に提案した。3ヶ月の滞在費用が準備され、彼は自力で4ヶ月間大学や博物館の標本を観察記録して帰国した。その間、多くの研究者の信用を得て、カリフォルニア大学バークレイ校が所蔵する歯を持つカイギュウ (*Dusisiren jordani*) の1体分の原標本を借り出した。滝川市高齢者事業団の力でレプリカを作って、滝川美術自然史館に展示したのだ。彼の行動力には驚かされた。

彼はタキカワカイギュウを新種のカイギュウ (*Hydeodamalis spissus*) として世界に発表終えた。論文の英文化では北海道大学の秋山先生の研究室に通いご指導を受けたようである。彼は再度、子供と接する学校を希望した。私は道教育委員会に勤務する高校時代の先輩に相談して、研究と教育の両立しやすい高等学校に職場を求めた。沼田町で化石発見が始まっていたので、北空知管内を期待したが空きはなく、旭川市内の高校に配属され、彼は日曜日にはオートバイで沼田へ通った。沼田町の村上教育長が沼田町に研究室を立ち上げ、1992年4月彼を迎え入れた。古澤君は沼田町教育委員会・自然史研究室・初代学芸員として町をリードすることになった。幌新太刀別川はタカハシホタテの産地だが、脊椎動物の化石発見が続いた。古澤君は1993年に「北海道沼田町産海生哺乳類化石群の年代と古環境」を共著で学会に報告した。化石発見はその後も続いたが、1998年4月に札幌市の博物館建設構想の立案のために、彼を札幌市に輩出すことになった。

研究者が定着すると化石が待っていたかのように発見されるものだ。札幌市内では豊平川の簾舞地域で、貝化石の発見は知られていたが、これまで脊椎動物化石の発見はなかった。しかし、2001年夏、地元の小学生親子によって肋骨が発見されたのだ。2003年になって、父親が中学生時代の担任山形由史氏を通じて木村が鑑定を求められ、現地で古澤君の鑑定で紛れもなくカイギュウの肋骨や胸骨であった。古澤君は「札幌市大型動物化石総合調査団」を組織した。その研究で産出層は約800万年前の砥山層中部であり、世界最古の大カイギュウ (*Hydrodamalis* 属) に分類して「サッポロカイギュウ」と呼ぶことにした。この発見ニュースが2008年に次の発見を呼んだ。上流の小金湯温泉前の河原で大型化石が発見され、古澤君の博物館活動センターに持ち込まれた。化石は地中に倒立するように立っていて、全身の発掘には3年間要した。古澤君は体長14mにもなるセミクジラ科のもので、約900万年前であると。2023年6月に開かれた山形市での化石研究会の総会で報告した。

彼の手元には、月形産の大型ヒゲクジラのクリーニングが進行中である。厚田村古潭産の化石は歯クジラのアルビレオニ科と分類して、一島啓人氏と共同研究中である。これらの化石を学会報告準備中に力尽きたのは、何とも残念でならない。多くの業績を残してくれたが、まだまだ期待されるものは多かったのに。残念だ！！

合掌

(北海道教育大学名誉教授)